

1 2	受験番号シール貼付欄

第 4 問 答案用紙<1> (会 計 学)

問題 1

問 1

その他有価証券は多様な性格を有しており、事業遂行上等の必要性から直ちに売買・換金を行うことには制約を伴う要素もあり、評価差額を直ちに当期の損益として処理することは適切ではないことから、全部純資産直入法が原則とされた。

問 2

部分純資産直入法が認められた背景には、保守主義の考え方がある。保守主義とは、真实性の原則の範囲内であることを前提に、収益をより少なく・遅く、費用はより多く・早く計上することによって、利益をより控え目に計上するという考え方である。

問 3

真实性の原則の範囲内であることを制約条件として、固定資産の減損処理では減損損失が大きくなるように、資産の金額が小さくなる大きな割引率が選択され、退職給付債務では費用が大きくなるように、負債の金額が大きくなる小さな割引率が選択される。

問題 2

問 1

繰延税金負債の金額： $60(x + t + d)$ 億円

問 2

負債とは、過去の取引または事象の結果として、報告主体が支配している経済的資源を放棄もしくは引き渡す義務、またはその同等物をいう。在外子会社の留保利益のうち、将来の配当により親会社において追加納付が発生すると見込まれる税金額は、親会社の繰延税金負債として計上される。ただし、親会社が在外子会社の配当方針を変更して配当を行わない可能性があるならば、支払義務があるとはいえないことから、負債の定義を満たしていない。

問 3

損益計算書に算入された収益と費用は税金等調整前当期純利益に集計され、これと法人税等とを対応させるために税効果会計が適用される。したがって、損益計算書に算入される段階での収益と費用は、税効果を控除しない総額で表示される。これに対し、その他の包括利益の内訳項目は、損益計算書を経由せずに各々が直接に純資産の部に計上されるものであることから、純額(税効果を控除した後の金額)で表示するのが原則とされている。

2 2	受験番号シール貼付欄

第 4 問 答案用紙<2> (会 計 学)

問題 3

問 1

①この仕訳は、自己株式の取得時の付随費用は自己株式本体の取引と一体であることから資本取引とする考え方によるものであり、取引の実質的側面に着目している。②現行制度では、付随費用は株主との間の資本取引ではないことから損益取引であると考えており、取引の形式的側面に着目している。③現行制度における考え方に基づけば、借方の科目を自己株式とするのではなく、支払手数料等として営業外費用に計上すべきである。

問 2

連結子会社が保有する親会社株式（持分相当額）は、企業集団で考えた場合、親会社の保有する自己株式と同様の性格を有するからである。

問 3

自己株式を消却すると、資本の控除項目たる自己株式の帳簿価額は減額されるが、同額が資本剰余金から減額されることになる。したがって、連結子会社が保有する自己株式を消却した場合、連結される子会社の資本の変動及び親会社の持分比率の変動はもたらされないため、連結貸借対照表上の純資産の部に変動は生じない。

問題 4

問 1

当期純利益は一期間にわたって生じたものであるため、当期純利益とともに、当期純利益を構成する収益および費用も、期中平均相場により換算すべきである。

問 2

項目の名称：為替換算調整勘定

差額が示すもの： 当該差額は、異なる為替相場により換算される在外子会社の資産・負債と純資産の総額を一致させるものであることから、資産・負債全体に対する包括的な調整項目を表している。なお、当該差額は子会社株式を売却する場合に実現することから、未実現損益としての性格も有する。

問 3

その他の包括利益には、前期以前に発生したものも含まれる。これは、当期との関連が薄いことから、当期の相場である期中平均相場による換算が適さない。また、当期に発生したものについては、決算時に金額が確定することから決算時の為替相場を用いるべきであり、期中平均相場による換算は適さない。

評点

第 4 問

全体講評

数少ない分野について数少ない問題数にて長文の解答を求めるのではなく、様々な分野から数多くの出題がなされており、実力が発揮しやすい試験であると思います。なかには、何をどのように記述することが求められているのか掴み難い問題もありますが、それに対しても役立つのは、基本的な知識・理解（の具体的な応用）であると思われます。

解法イメージ例

これは、平均的な知識・理解の受験生が試験会場での緊張感の下でどのように解答を作成するかを想定したものです。もちろん、知識も理解も判断プロセスも解法パターンも人それぞれであると十分に承知していますが、問題への取組み方の参考の一助となれば幸いです。

問題 1 : **問 1** と **問 2** は基本的な事項であるが、**問 3** は何をどのように記述してよいか迷う。白紙解答は避けたいことから、「そもそも論」などに言及しつつ、早めに切り上げるのが良いだろうか…。

問題 2 : **問 1** は細かく、**問 2** は難しく、**問 3** は何をどのように記述してよいのやら…。**問 1** は白紙解答も止む無しか。ただし、**問 2** は、負債の定義は基本的な事項であり、残りについては問題文からの誘導である程度までは行けそう。 **問 3** は、白紙解答は避けたいことから、「そもそも論」や基本的な知識・理解の活用で対応すべきなのか…。

問題 3 : **問 1** と **問 2** は基本的な事項。**問 3** は応用的な事項かと思いますが、たとえ当該事項を知らなくとも、仕訳や下書きにて探っているうちに正解を導き出せたり、いきなり「影響なし」が閃くような方も居る気がします。

問題 4 : **問 1** は基本的な事項。**問 2** は、ズレとするか、包括的な調整項目とするか、更に未実現損益とまで言及するべきか…。 **問 3** は、1つの理由でいいのならば典型論点ではあるのだが…。

合格ライン

基本的な事項や典型論点は、キッチリと解答しておきたい。その上で、何をどのように記述すればよいか迷う問題について、どれだけ粘ることができたのかがポイントになりそうです。ただし、この第4問の他に第3問や第5問も控えていることから、粘りつつもある程度で仕上げる・切り上げるというバランス感覚も重要であると感じました。

— 以 上 —